

モンテッソーリ教育における音感ベルの学習過程の特徴

—アンナ・マリア・マッケローニの音楽指導に着目して—

藤 尾 かの子

(本講座大学院博士課程後期在学)

Features of the Learning Process of the Bells in Montessori Education: With a Focus on the Musical Guidance of Anna Maria Maccheroni

Kanoko FUJIO

Abstract

The purpose of this study is to clarify the use of bells in Montessori education and the specific features of these bells. Maria Montessori (1870-1952) took sixty years to develop the Montessori method. Especially, Anna Maria Maccheroni (1876-1965) was entrusted with the planning of musical activities and development of materials by Maria Montessori.

A study has been carried out on the music guidance of Maccheroni. However, a study on the whole aspect of music guidance in Montessori education has not been carried out yet.

According to Maccheroni, the bells are to be used as the primary material for children to perceive musical elements. She wrote the booklet, “*Orecchio, voce, occhio, mano.*”, so that the children could spontaneously wrestle with music. The bells are placed as the fundamental material in the booklet, which includes musical activities.

The purpose of this study is to clarify the learning content and features of the learning process of the bells on the basis of the historical records of Maccheroni. It is important to clarify the details of musical activities used in Montessori education.

1. はじめに

本研究の目的は、モンテッソーリ教育における音楽の分野において基礎的な教具として位置づけられている、音感ベルの学習内容を、アンナ・マリア・マッケローニ (Anna Maria Maccheroni, 1876-1965) (以下、マッケローニ) の著作を中心に明らかにし、学習過程の特徴を解明するものである。

モンテッソーリ教育は、イタリアの医学博士であり、また教育者でもある、マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870-1952) (以下、モンテッソーリ) が、約 60 年かけて確立した教育法である。マッケローニとモンテッソーリは協同でモンテッソーリ教育法の理論を検討し、実践に取り組んだ。モンテッソーリは音楽家ではなかったため、とりわけ、音楽にかかわる活動内容の考案及び教具・教材開発は、マッケローニに任されていた。

モンテッソーリ教育におけるマッケローニの音楽指導に関する研究として、東屋敷 (2012) と Miller (1981) が挙げられる。東屋敷は、モンテッソーリ教育における音楽指導が、幼児期から児童期にかけて系統的に構成されていることを明らかにしている。さらに、それらの音楽指導の方法を我が国に取り入れることへの可能性について言及している。Miller は、モンテッソーリ教育を実践している幼稚園での自身の現場経験と、当時の資料を基にし、モンテッソーリ教育における音楽プログラムを明らかにしている。しかしながら、モンテッソーリ教育における音楽指導の全貌を解明した研究は存在しない。

マッケローニの史料を概観すると、音感ベルは、モンテッソーリ教育における音楽の分野において、子どもが音や音楽に関わる様々な要素を知覚する能力を身につけるための、最も基礎的な教具として位置づけられている。また、彼女は、子どもが興味を持って、自発的に音楽に取り組むことができるようになることを目的として、“*Orecchio, voce, occhio, mano.*” (=耳, 声, 目, 手) という名の冊子を残した。この冊子では、音感ベルを基礎的な教具として、多くの活動内容が紹介されている。そこで、本研究では、マッケローニの史料を基に、音感ベルの学習内容及び学習過程を明らかにし、その特徴を解明する。このことは、モンテッソーリ教育における音楽の活動内容の全貌を解明することにおいても意義があると言えよう。

2. モンテッソーリ教育法の概要

2.1 モンテッソーリ教育法の基点

モンテッソーリは、自身の教育法を構築するにあたり、子どもの発達を生理学的な側面から見るとを基点に置いている。その際、彼女は、「吸収する精神¹」と「敏感期²」という、0才から6才の子どもの生理学的な側面に見られる働きに着目した。この働きは、文化・時代・場所を問わず、全ての子どもが持つ普遍性のあるものとされている。これらの働きにより、子どもは、自身の感覚器官を通して、周囲の環境の印象や情報を自身の内面に取り入れる。このような特徴を持つ時期に、子どもの発達に適切な環境を与えることで、子どもは自分の体を動かしながら、事物に対する概念を形成していく。そしてそれらの概念を基にして、次第に知的な活動を展開させていく。

2.2 モンテッソーリ教育法の方法と目的

モンテッソーリ教育では、子どもが整えられた環境の中で自発的に教具を選択するという、子どもが主体的に学ぶ方法が採られている。モンテッソーリの言う自己教育の特徴は次の3点を挙げることができる。すなわち、教具を自由に選択する、好きなだけ繰り返すことのできる自由が与えられている、身体を通して活動する、という内容である。

1点目の、教具を自由に選択する、とは、子どもが自身の内的欲求に従って、環境に準備されている教具の中から1つの教具を自己選択する、ということを目指す。(オスワルト・シュルツェベネシュ 1974, p.104)。子ども自身が内的な興味によって選択した教具を用いることで、自然と集中して活動する姿が見られる。2点目の、好きなだけ繰り返すことのできる自由が与えられることによって、子どもは自分の動きを調整していく。さらに、モンテッソーリによると、このような子どもの姿を、「子どもの内部の発育と結びついた集中と反覆の現象」(オスワルト・シュルツェベネシュ 1974, p.104)と表現している。つまり、活動を繰り返し行うことは、子ども自身の欲求と、その年齢の特徴ある条件が結びついていることによる表れであるため、教師によって促すことは不可能であるということである(オスワルト・シュルツェベネシュ 1974, pp.118-119)。そして3点目の、身体を通して活動することに関しては、子どもが筋肉や神経を通して、自分の動きを調節することを確立するということである(オスワルト・シュルツェベネシュ, 1974, p.105)。またこれに伴い、意思が形成されていくことも強調されている(オスワルト・シュルツェベネシュ 1974, p.96)。

以上のように、子どもが教具を用いて、自分自身の身体と思考を働かせながら活動するという、自己教育を行うことによって、子どもは事物に対する概念を形成し、知性を発達させていくのである。そして次第に、知的な活動を行うことができるようになる。モンテッソーリは、以上のような自己教育の過程を通して、子どもが自由に生きることを選択し、豊かに表現し、建設的に社会にかかわりながら自分自身を創造していくことを教育の最終目的に掲げていたと言える。

2.3 モンテッソーリ教育における環境の全体構造

モンテッソーリは、教育の基本原則として、子どもの興味と自発性・活動性・自由・適切な環境・援助者の教師、を配置するという原理を打ち出している。モンテッソーリの言う環境の中には、子どもが触れるべき世界として、4つの領域が設定されている。それはすなわち、日常生活・感覚・言語・数、である。そこで、子どもは、自由に扱うことのできるモンテッソーリ教具と、物理的・人的に整えられた環境が与えられ、活動を行う。

人的環境としての教師は、子どもに強制的な指導をせず、第1に子どもの観察者でなければならない。これは、子ども一人ひとりの発達段階に基づいた、子ども個人のペースを重視しているためである。そのため、教師は、子どもの活動に基づいて、子どもの発達段階に最もふさわしいと考えられる課題を与えたり、または、援助を行うのである（ボイド 1979, p.106）。また、物理的環境としての教具は、子どもが自由に扱うことができるように、環境の中に配置されている。子どもはこれらの領域において、容易なものから複雑なものまで全て準備されている教具の中から自己選択をして、自分の身体を動かしながら活動をする。このように子どもの自発的な活動を重視したことには、モンテッソーリが教育を通して子どもの身体的な側面と知的な側面とを発達させることを意図したことによる（モンテッソーリ 1990, p.92）。

3. 1900年代初頭におけるモンテッソーリ教育法の音楽指導の概観

モンテッソーリは、1916年に刊行された自身の著作、*L'autoeducazione: nelle scuole elementari*において、約60ページに渡って「音楽」に関して述べている。モンテッソーリは本著において、自身の教育法における「音楽」の活動内容に関しては、マッケローニが担った部分が多いと述べている。よって、初期の音楽にかかわる活動内容は、両者が協働で確立したと言える（Montessori 1973, p.10）。

モンテッソーリは本書において、幼児から10歳までの子どもを対象として、「子どもの家」開設時における3年間の実験的な試みをまとめている。本書における「音楽」の内容は、1. 音階 (the scale), 2. 楽譜の読み書き (the reading and writing of music), 3. 長音階 (the major scales), 4. リズム運動 (exercises in rhythm), 5. 音楽を聴くこと (musical auditions), という5つの項目に分類されている。

本書を概観すると、1. 音階, 2. 楽譜の読み書き, 3. 長音階では、音感ベルが音楽の活動における基礎となる教具として扱われている。その後、様々な教具や教材を用いて、長音階の構造を捉える活動や、移調の方法を学ぶ活動が準備されている。また、これらの活動と平行して、読譜や記譜の活動も行われる。さらには、鍵盤楽器と弦楽器の演奏への導入的な練習も準備されている。4. リズム運動では、モンテッソーリとマッケローニが、子どもに、自分自身で音楽のリズムを感じ取ることができる潜在的な能力があることに着目し、子どもの自発的な動きを重視したリズム運動を実践している。5. 音楽を聴くことは、モンテッソーリは、子どもが音楽に対する理解を深めることに留まらず、感情のさらに高い段階を創造することを目的とし、活動として取り入れている（Montessori 1973, p.10）。ここで扱われる曲は、クラシック曲から、歌曲、さらには民謡など幅広い。

4. アンナ・マリア・マッケローニの音楽教育観

マッケローニは、人間が自分たちの力で、言語や数学などを確立してきたのと同様に、音楽も、人間が知性を働かせながら自分達自身で確立してきたという、人間の傾向性に着目している。彼女の史料を概観すると、音楽と言語のかかわりについて多くの記述が見られ、音楽を「音楽的な言語：musical language」と表現し、人に何かを伝える手段である言語と同様の機能が音楽には備わっているとしている（Maccheroni, nd-a, p.3）。彼女の著作において、そのことが顕著に述べられている文書は以下である。

スピーチにおいて言葉を用いるのと同様に、メロディーでは音符を用いる。スピーチの中で使用される言葉にはそれぞれ意味があり、文章の全体にその言葉の意味が適合している。すなわち、私たちはそれぞれの言葉を単独のものとして捉えるのではなく、スピーチ全体の意味することを聞くのである。そのようなことから、メロディーはスピーチと同様の機能が備わっている。（Maccheroni, nd-b, p.7）

すなわち、マッケローニは、楽曲に使用される音符や、それに伴って使用される強弱記号や表情記号などそれぞれが、楽曲全体を構成する重要な音楽的な要素であり、それら全てが機能し合うことで、その楽曲の持つ芸術性やメッセージを人間が感じ取ることができる、と考えたと言える。

マッケローニは、以上のような音楽観を持ち、モンテッソーリと協同で子どもが音楽の様々な要素を学ぶことのできる音楽指導を確立した。彼女は、子どもが音楽を学ぶ重大な年齢を、3歳から5歳であると述べている（Maccheroni, nd-a, p.11）。彼女によると、この時期の子どもは、教師による適切な援助と十分な刺激を受けることによって、容易に、そして正確に音楽を学ぶことができるとしている。そうするこ

とで、後に子どもは、音楽に対して全体的な興味を引き起こし、さらにその他の能力を発達させていくと述べている (Maccheroni, nd-a, p.11)。そこで彼女は、自身の音楽指導において、モンテッソーリ教具である音感ベルを基礎的な教具として位置づけ、子どもが自発的かつ正確に音楽を理解していくことのできる、体系的な学習内容を構築したのである。

5. 音感ベルの特徴

音感ベルは、子どもが操作するためのものと、活動の確認を行うために使用される同一のセットの2つが組になって準備されている。写真1が示す、手前に配置されている白と黒の音感ベルは、子どもが活動において、確認をするために使用され、奥に位置する茶色の音感ベルは、子どもが操作する際に使用される。

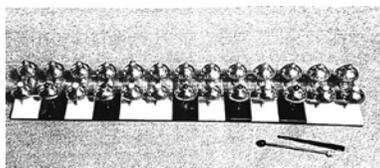


写真1 音感ベル

(岩田陽子 『MONTESSORI-METHOD モンテッソーリ教育(理論と実践) 感覚教育』 第三巻, 学習研究社, 1996, p.116より転載。)

音感ベルの音域は、中央ハ(ド)を開始音として、全音と半音の13の楽音から構成される1オクターヴの音が鳴る。譜例1は、音感ベルの音域を示している。



譜例1 音感ベルの音域

(マリア・モンテッソーリ/平野智美・渡辺起世子訳 『私のハンドブック』 エンデルレ書店, 1989, p.60より転載。)

6. 音感ベルの活動内容

マッケローニによると、子どもの音楽的な発達は「耳、声、目、手」を通して行われる (Maccheroni, nd-a, p.7)。マッケローニの示した音感ベルの活動は、これら身体の器官を共に機能させながら音楽を学ぶ、体系的な学習過程が示されている。彼女の示した音感ベルの活動は以下の通りである。

表1 マッケローニによる音感ベルの学習内容の概要

活動名	活動内容
(1) 音の同一性合わせ	ハ長調の音階を構成する音を用いて、同一の音の音感ベルをペアにする。
(2) 音の名称	音感ベルの音と、音名を対応させる。その後、音名の示された円板を使用し、視覚的に音名を認識する。
(3) 五線譜	音感ベルの音に対応する音の円板を五線譜の板の上に置く。そして、それを音名で歌う。
(4) 声	ハ長調の音階の上行形や下行形に、簡単な歌詞をつけて歌う。
(5) 音階を構成する	8つの音感ベルを使用して、ハ長調の音階を構成する。
(6) ゲーム	音感ベルで同一性合わせをする。集団で、音階の構成を行う。
(7) 数字の書いていない白い円板	五線譜の板と音名の示された円板を使用し、音を読む。
(8) 黒い円板	音名の示されていない円板を五線譜の板の上に置き、それらを音感ベルで鳴らす。
(9) チャート	様々な形式で示されるハ長調の音階を音感ベルで鳴らす。または歌う。
(10) 楽譜を書く	チャートに示された音階を、紙に書かれた五線譜に書き写す。
(11) 紙に書かれた歌	子どもに馴染みのある短い歌の旋律を記憶し、五線譜に書く。

以下の活動は、上記の活動と並行して行う	
(12) 全音と半音	音階が、全音と半音で構成されていることを学ぶ。また、音楽用語を学ぶ。
(13) 黒色のベル	音感ベルで半音を聞き、それがシャープまたはフラットであることを知る。
(14) 全音階	音感ベルで全音階を構成した後、「全音階」という言葉に対応させる。
(15) 半音階	全ての音感ベルで半音階を構成した後、「半音階」という言葉に対応させる。
(16) 2つの音階	半音階からいくつかの音感ベルを取り除き、全音階を構成する。
(17) ゲーム	(6) 集団で行うゲームの応用
(18) 4音音階	音感ベルでハ長調の音階を構成した後、それを2つに分け、4音音階を構成する。
(19) 音階を分解する	ハ長調の音階が分解して示された8枚の紙を、正確に配列する。
(20) 音階を正確に構成する	音感ベルの音と音符を一致させ、トニック・ドミナント・メディアントの役割を知る。
(21) 長音階—短音階	長音階から短音階に変化させる方法を学ぶ。
(22) ヘ音記号	円板を用いて、ヘ音譜表の読み方を学ぶ。
(23) 和音	楽譜上に示された三和音をベルで鳴らした後、同様の和音をピアノで弾く。
(24) 静粛の練習	教師が「静粛」と黒板に書くと、クラスの中にいる全ての子どもが静粛な環境をつくる。
(25) 手の位置	鍵盤楽器を演奏するための基礎的な手の形を学ぶ。

7. アンナ・マッケローニによる音感ベルの学習過程の特徴

マッケローニの音楽指導を概観すると、音感ベルの学習過程を通して、子どもは主体的に音楽を学習していくことができることが明らかになった。以下、音感ベルの学習過程における特徴を述べていく。

(1) 静けさの概念を形成する

モンテッソーリが子どもの洗練された聴覚を形成するために「静けさ」を重視し（モンテッソーリ 1974, p.160）、自身の教育法に「静粛の練習」を取り入れたように、マッケローニも、その活動における音楽的な意義を強調して述べており、自身の音楽活動にも取り入れている。「静粛の練習」では、子どもが自らの身体全体に意識を向け、身動きをしないことが教えられる。子どもは自分が動くことによって生じる、わずかな音にも注意し、不動の姿勢をとるために動きを抑制することで、静けさを深めていく（モンテッソーリ 1992, p.168）。この活動を通して、子どもは、音を聞く耳を形成すること、精神を安定させること、身体の動きをコントロールすることなど、子どもが音楽をする上で基盤となる力や態度を形成することができると言えよう。

(2) 音高の概念を形成する

マッケローニが自身の音楽指導において、ハ長調の音階を基礎となる調性に設定したのは、モンテッソーリ教育における「感覚教育」の理論に基づいている。子どもが自由に知的な学習に取り組むために、モンテッソーリは、音響や温度、色彩などに対する感覚の段階を、子どもの内面に秩序正しく位置付けることを重視した。そして、この感覚刺激を系統立てて形成する時期が、3歳から6歳までの「敏感期」と呼ばれる期間であることに着目し、自身の教育に「感覚教育」を組み入れたのである（モンテッソーリ 1974, p.169）。マッケローニも同様に、子どもの音楽に対する「敏感期」が3歳から5歳までの期間であるという生理学的な見地から、多くの活動を設定している。すなわち、幼児期に、楽音が秩序正しく配置されている音感ベルを用いて繰り返し活動することで、子どもの内面にハ長調の音階を構成する音を正確に位置付けることが可能となると言える。さらに、ここで獲得した正確な音感、子どもが後に行う知的な音楽活動に結び付くと考えられる。

(3) 音と音名を対応させて認識する

マッケローニの指導において、音に音名を一致させる活動は、子どもが音感ベルを用いて全ての音を合わせる事ができた後に行われる。音合わせができるようになった子どもは、ハ長調の音階を構成する音に対応する全ての音名を音声で学んでいく。さらに、子どもが文字に興味を持っている場合は、円板を用いて、楽音と文字を一致させて認識する活動も取り入れられている。この学習過程は、子どもが自分の感じたことを外界に向かって表現することができるように、活動において物の性質の違いを認識したら、その性質を言葉で表すという、モンテッソーリ教育法に一貫して通ずる方法を基盤にしていると言える（モンテッソーリ 1974, p.169）。これらのことから、マッケローニは、子どもが聴覚を通して内面に取り

入れた音の情報を、対応する固有の音名のもとに正しく位置付けることを意図し、音に音名を対応させる活動を設定したと言える。

(4) 正確な音程で歌う

マッケローニの音楽指導において、歌う活動が数多く取り入れられていることは、モンテッソーリの著作において子どもが歌をうたうことに関する記述があまり多く見られないため、特徴があると言える。マッケローニは、日常の生活の中で、子どもの身近な曲を歌うことや、賛美歌を歌う機会を多く取り入れている。また、音感ベルの活動に伴って、音階や1つまたは2つの音に、子どもの名前や挨拶言葉をあてて歌う活動を取り入れている。すなわち、彼女の音楽指導において「歌う」ことは主要な活動として位置付けられる。

子どもは、音感ベルを用いた活動を繰り返し行い、さらに、日常生活の中で音楽に触れる機会が多く備わっているため、正確な音程を自身の内面に取り入れ、それらを音階の並びに沿って正確に位置付けている。つまり、歌を歌う際も、容易に正確な音程で歌うことができると言える。

(5) 音階を構成する

子どもが意思を働かせながら繰り返して活動することで、感覚を通して内面に位置付けられた情報がより強固なものになり、自分の力で知的な活動を行うことができる（モンテッソーリ 1974, pp.120-122）という「感覚教育」の基礎的な理論が、音感ベルの活動にも適用されている。ここで言う知的な作業とは、音感ベルを用いて子どもが意思を働かせて自分で音階を構成することである。マッケローニの音楽指導において、ハ長調の音階を構成する活動は、個人で行うものや集団で行うものなど、数多く準備されている。従って、子どもがハ長調の音階を構成していく中で、子どもは知的に自己教育を行う段階に達しており、音楽における基礎的な能力とも言える、正確な音感を確立することや、ハ長調の音階の音列を内面に形成していくことを促すことができる。

(6) 読譜と記譜を行う

五線譜の書かれた板と、円板を使用して、読譜の練習が行われる。五線譜における音符の相対的な位置を認識していくことで、子ども自身が五線譜に音符を書き添っていく際の基礎的な知識を得る。

五線譜の板を用いる初めの活動では、ト音譜表のみ提示される。そして、ト音譜表の活動に慣れてくると、菱形の楽譜を使用し、ヘ音譜表が提示される。この際、ト音譜表とヘ音譜表は、視覚的に連続的なものとして提示されるので、ト音譜表における音の読み方を獲得した子どもは、容易にヘ音譜表に示された音を読むことができる。

また、モンテッソーリ教具には、「間違いの自己訂正」というシステムが備わっており、教師が子どもに教具を提示する際にその方法が教えられる。そのため、五線譜の板を用いる活動において、子どもが音の読み方や五線譜における音の相対的な位置を間違えたとしても、それを自己訂正することができる。このように、子どもは正確な知識として、楽譜に関する規則を獲得することができると考えられる。

(7) 短い曲を創作する

子どもが読譜に慣れてくると、黒い円板を五線譜上に自由に並べる活動が取り入れられている。子どもは自らが並べた円板を見て、それをベルで演奏したり歌ったりする。このような活動を取り入れることで、後の子どもの創作活動にも発展する可能性があると考えられる。

(8) 音階の構造を捉える

子どもがハ長調の音階を、内面に正確に位置づけ、さらに読譜や記譜などの活動を行うようになると、音階の構造を捉える活動が設定されている。それらは、全音と半音の概念を形成する、全音階・半音階・4音音階の構造を捉える、という活動である。これらいずれの活動においてもハ長調の音階が基準となっている。その理由として、ハ長調の音階はその他の音階と比較して、シャープやフラットといった変化記号がついておらず、最もシンプルな構造であるため、子どもは混乱することなく、音階の構造を捉えていくことができることにあると言える。また、音階の構造を示すために必要な音楽理論用語や、音階の名称も伝えられる。これらの活動を通して、子どもは音階を構成する音の配列には一定の法則があるということを知ることができる。

(9) 長音階から短音階に変化させる方法を学ぶ

音感ベルを用いた移調の方法は、ハ長調の音階を、変化記号を用いて短音階にする方法が紹介されてい

る。子どもは、さまざまな音階の法則を、具体物を通して学んでいくことができる。さらに、音感ベルの移調の活動に引き続き、トーンバーという教具を用いて、移調の発展的な方法を学ぶことのできる学習過程もマッケローニによって残されている。

(10) 鍵盤楽器を演奏するための基礎的技術を身につける

マッケローニの音感ベルにかかわる活動は、以上のように、音を正確に位置付け、音楽を理論的に学ぶこと以外にも、鍵盤楽器を演奏するための基礎的な技術を身につける方法が書かれている。これは、最終的に子どもが楽器を演奏し、自由に自己表現をすることができるようになることをねらいとしたことによると言える。

(11) 音楽について幅広い知識を持つ

マッケローニは、日常の中で、子どもが絵を描いたり、その他の活動を行っている間に、教師によって演奏される生の音楽を子どもに聞かせることについて紹介している。主な作曲家として挙げられているのは、モーツァルト、バッハ、ベートーヴェン、ショパン、ヴェルディー、ベッリーニなどの著名な作曲家である。教師は演奏した後に、演奏した曲の作曲家の名前を伝え、後に子どもはその作曲家に興味を持つようになるとマッケローニは述べている (Maccheroni, nd-a, p.7)。以上のことから、マッケローニの音楽指導は、子どもが生の音楽に触れることのできる機会が設けられており、様々な作曲家や曲に興味を持つ鍵を与えていると言える。

8. おわりに

マッケローニの音感ベルにかかわる活動を概観すると、楽音をハ長調の音階の並びに沿って正確に位置付けた後に、それに伴う音名を一致させ、読譜や記譜といった活動へと移行している。さらに、子どもが楽器を演奏するために必要な技術や音楽理論までも有す、系統的な学習過程が示されていると言える。また、このように子ども自身が音楽にかかわる活動を行うだけに留まらず、日常生活の中で生の演奏を聴くことの重要性も強調されており、音楽は常に子どもの身近なものとして位置付けられていることも明らかになった。

音感ベルの活動に関しては、モンテッソーリの著作にも多く述べられているが、マッケローニはモンテッソーリ教育法の理論に沿って、系統的な音楽指導を打ち出している。その最も顕著な点は、彼女の音楽指導の基礎に、静粛の練習が位置付けられていることである。モンテッソーリが自身の教育法において、「音に対して、静けさがある」ということを子どもに伝える活動を設定したことは、「音を聞く耳を形成すること」ことや、「精神が安定していること」という、子どもが音楽をする上での基盤となる力を形成することができると言えよう。物理的な静けさと、精神面における安定感の両者が成立する時こそ、子どもはベルの静かな音を聞き、活動を展開させていくことができるのである。また、モンテッソーリが「敏感期」に着目して、子どもの発達段階に沿う活動を系統的に準備したのと同様に、マッケローニは、子どもの音楽に対する「敏感期」があることに着目し、自身の音楽指導を確立した。すなわち、ある一定の期間、子どもが繰り返し活動を行って内面に取り入れた感覚に、名称を対応させる方法を実践することで、子どもが自分の身体を動かしながら、容易に音楽の様々な要素を内面に取り入れ、さらにそれらを正確に分類することができると考えられる。

以上のことから、マッケローニの構築した音楽指導は、子どもが自由に自分の力で音楽を自己表現することができるようになるための力を、着実に身に付けていくことのできる学習過程が示されていることが明らかになった。本研究は、マッケローニの著作の中から、とりわけ音感ベルに焦点を当てたが、彼女は音楽に関するその他多くの冊子や書物を残している。よって、今後の課題は、それらの内容を明らかにし、マッケローニの音楽指導の全貌を解明していくものとする。

注

- 1 「吸収する精神」とは、モンテッソーリによって定義されたモンテッソーリ用語である。彼女によると、おおよそ0才から6才の子どもは、自分が存在する環境にある印象や情報を、全て自分の内面に吸収する力が働く。この働きのことを「吸収する精神」と定義している。
- 2 「敏感期」とは、19世紀のオランダの生物学者であるド・フリース (Hugo de Vries, 1848-1935) によっ

て定義付けられた理論である。「敏感期」は、全ての生物の幼少期に、その生物固有の能力を身につけるため、環境に含まれる特定の要素に対する特別に敏感な感受性が、ある一定の期間に現れることである。モンテッソーリは、この理論を人間に置き換えて考察したところ、誕生からおおよそ6才までの期間が該当するとしている。

引用・参考文献

- ボイド, ウィリアム (1979) 『感覚教育の系譜—ロックからモンテッソーリへ』 中野善達・藤井聰尚・茂木俊彦訳, 日本文化科学社.
- 東屋敷尚子 (2012) 「モンテッソーリ教育における音楽指導の理念と内容—音楽的能力の育成と第2の言語としての音楽の可能性に着目して—」 東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文.
- 岩田陽子 (1996) 『MONTESSORI—METHOD モンテッソーリ教育 (理論と実践) 感覚教育』 第三巻, 学習研究社.
- Maccheroni, Anna Maria. (nd-a). *The developing musical senses: the Montessori approach to music for the ear, voice, eye, and hand.* (Originally published as *Orecchio, voce, occhio, mano.* n.p., n.d.) Trans. by Rosina Brienza. Greenwood Press.
- Maccheroni, Anna Maria. (nd-b). *The Montessori music book.* Battersea: Salesian Press.
- Miller, Jean Karen. (1981). “The Montessori music curriculum for children up to six years of age.” Cleveland: Case Western Reserve University.
- モンテッソーリ, M. (1974) 『子どもの発見』 鼓常良訳, 厚徳社.
- Montessori, Maria. (1973). *L'autoeducazione: nelle scuole elementary.* Milano: Garzanti.
- Montessori, Maria. (2009). *The Advanced Montessori Method: the Montessori elementary material.* Trans. by Arthur Livingston. Massachusetts: Linnaean Press.
- モンテッソーリ, M. (1990). 『世界新教育運動選書 19 自発的活動の原理—続モンテッソーリ・メソッド』 阿部真美子著訳, 明治図書出版.
- モンテッソーリ, M. (1992) 『創業六十周年記念出版 世界教育学選集 77 モンテッソーリ・メソッド』 梅根悟・勝田守一監修, 阿部真美子・白川蓉子訳, 明治図書出版.
- モンテッソーリ, M. (1989) 『私のハンドブック』 平野智美・渡辺起世子訳, エンデルレ書店.
- オスワルト, P., シェルツァーベネシュ, G. (1974) 『モンテッソーリ教育学の根本思想—モンテッソーリの著作と活動から』 平野智美訳, エンデルレ書店.
- 相良敦子 (2008) 『MONTESSORI—METHOD モンテッソーリ教育 (理論と実践) モンテッソーリ教育の理論概説』 第一巻, 学習研究社.